お魚くわえたドラ猫

カツオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お魚くわえたドラ猫

【Ｎコード】
Ｎ１５５０Ａ

【作者名】
カツオ

【あらすじ】
２１歳の専業主婦の涼子は何となく不幸な人生を送っていた。ある日、涼子が夫の夕飯の鮭を焼いていると、それをドラ猫に食われてしまった。だが、それから涼子の人生が変わっていく。一体ドラ猫には何があるのか。

第一話　裸足で駆けてく陽気な専業主婦

なんで私はドラ猫を追いかけているんだろう。
なんか裸足になってるし。
それより、あんたが食わえている魚、めちゃ高いの！！さっさと返して！！
私は１９歳で２２歳の会社員と結婚して早３年。
私はその間専業主婦として夫の生活を助太刀している。
それでも子宝に恵まれない自分にグッジョブな毎日を過ごしている。
それに近所の人と仲が悪くなってしまった。
なんかＭＤコンポの音量キーがぶっこわれてしまい、最大の音量でしか聞けなくなってしまった。それが騒音の原因になったのだろう。
「なんで修理しないの？普通するよ」
とご近所の方（へっ、本当はごはつけたくねぇんだよ）に言われてるが、私は修理しない。
だって６万もしたのに、信用できない人にむやみに触れられたら嫌だもん！！（うざい）。
ま、そうゆうわけで仲が悪い訳。ニャハハ。
私の名前は涼子。
じゃんけんで勝った兄ちゃんが付けた名前。（普通、じゃんけんで決めるか！？）
夫の名前は槙。
育児をしたいという夢のエリートサラリーマン。
（じゃてめぇがやれよ！！家事全般！！）
さて、本題だが何故私が走ってるかと言うと、私が夫の好きな鮭（一切れ１２０円）を焼いていたら、小さい窓からドラ猫参上。
「フー！！」
となんか知らんけど威嚇してたぜ。

「ふっ、ドラ猫、あんたなんか菜箸で勝てるよぉ！！いざ鎌倉！！」
私はそういって菜箸をドラ猫に向けた。本気だった。
「どうりゃー！！！！！！」
私はおもいっきりの速さで菜箸でドラ猫をつついた。
勝てるっと心の中で思ったが、ドラ猫はすっとよけて私の鮭一切れを優しく、そして強く食わえた。
「なっ、このドラ猫！！」
私は菜箸をダーツのように投げたが、ひらりとかわして小さい窓から逃げた。
私はこうしちゃいられないとドアを開け、外に出てドラ猫を追いかけた。
この時のドラ猫の足は異様に速い。
私がこいつは食うなと確信した犬に追いかけられた時と同じ速さだ。多分だが、自分の足で人生が決まると思っているのだろう。ちなみに私もそうだった。
いざ食われるか食われまいかの勝負、結果を白星にしたいから必死に生きているものは走るのだ。
そんな事よりこのドラ猫、商店街の方に向かってるじゃないか！！
やめてくれ、今はタイムサービスだから人が多いんだ～なんて猫なんかに伝えられないから私は真面目に焦った。
猫はペースを変えずに走って商店街へと近づいていく。
「やめてぇ（超小声）」
はい。商店街へ突入。なんとか人をよけて走れるぐらいだ。
なんか知らないけど猫がスピードを速めた。
こいつ、人になったらいい陸上選手になれるなと確信しながらあいつを追いかける。
人々が笑いながら私を見る。
店員も手を止めて私を観覧してる。さっさと仕事しろよ。
私は鮭を取り返したい執着心より人々の目を心配する自分の心

を優先してドラ猫を追いかけるのをやめた。
ドラ猫がだんだんと私から離れていく。
なんで私はそんなに運が悪いんだろ？仕事がやりたいけど専業主婦だし、ＭＤコンポ壊れてるし（だから直せよ）、ご近所の皆様と仲が悪いし、はぁもう死にたいなあ（夕飯どうするんだ）。
私がそんな事を思ってると、足下になんかあるような感じがある。
私が足下を見ると、それは紙で紙にはこう書いてあった。
「商店街開店５周年！！超豪華賞品が当たり放題！！外れてもＭＤ５枚の大福引き大会。一枚で二回できます」
これは福引き券だそうだ。
一枚で二回出来るし、外れてもＭＤ五枚って所がまたいい。
私はそれを拾って辺りを見渡すと、持ちきれないほどのＭＤを必死に運んでいるおばさんがよろけながら歩いていた。私はあんな風にはなりたくない。
探した結果、目の前にあった。
私が来てみると、店員が笑顔で私を歓迎してくれた。
「ようこそ！！商店街５周年（長いのでカット）」
「これ、二回出来るのですよね？」
「はい。この商店街５周年（長いのでカット）は一枚で二回出来るし、おまけに末賞でもＭＤをプレゼント」
「はぁ。じゃやります」
「はい！！」
私は福引き機を回した。ＭＤはＭＤコンポが壊れてるから嫌だ。
玉が落ちた。
見ると、紫だった。普通なら４等ぐらいの色だ。私は喜びながら玉を持って言った。
「紫出ました」
「はい。ＭＤです」
はいっよくある～。もしかしてこいつらイカサマしてるな。

私は二回目を回した。
夫にＭＤ１０枚でもプレゼントするかと思った時に玉が落ちた。
玉は青色だ。これは３等ぐらいでしょ。
「青色です」
「……」
店員さん？
私が異様な心配してた時、手で持つ鐘をカランカラン鳴らした。
私は何がなんだか分からなかった。とりあえず当たったことは確かだが。
「おめでとうございます！！１等です北海道の旅３泊４日です！！」
あはは。これは鮭返せどころじゃないな。
あはは。
そういえば私、裸足でドラ猫を追いかけてたのか。
これじゃサザエさんだな。明日町に買い物に行ったら財布忘れるかも。
ＭＤ５枚と北海道の旅の券が入った封筒を持って私は歩いていた。
今日の夕飯はどうしようと思った時はもうほとんどの店が閉まっていたし。
すると、前にあのドラ猫がいた。もう鮭は食わえてない。
私が立っていると、ドラ猫はにゃーと鳴いた。
この鳴き声はまるで借りは返したぜって感じだった。
私は笑顔になった。
家に帰ると、夫が立っていた。
「槙。あのね」
「はら減ったな。飯は？どうしたの？」
「それよりも、見て」
「ん？」
「北海道の旅！！三泊四日も！！」
「ぬぁああにぃ！？」

ありがとう。猫。

第二話：実は私はいつでもレッド希望！！

北海道旅行が当たって3日たった。
槙は久しぶりの北海道（結婚前いつも行ってたらしい憎たらしい（だまれｂｙ槙））なのでいつなのか明日かと毎日聞いている。明日だったらもう準備してるだろ。
北海道しか頭にない夫は忘れたかもしれないが、明日は私の誕生日だ。そういえば、槙は結婚前に
「ガキじゃないんだから誕生日でもプレゼントを渡すだけにしよう」
とか言ってたけどふふふ。槙もやりたいくせにぃ～。（うせろ）
やるなって言われても私、ケーキ大好きマン！！レッド希望！！（だからガキなんだよ）ダイエット中の私が唯一デザートが食えるイベントを壊されてたまるか！！それなら、友達とやるわい！！
とゆうわけでデパートに到着。
誕生日セールで盛り上がってるね！！（ほぼ毎日だろ）
まずはろうそく！！
「いらっしゃいませ」
店員が私を迎えてくれた。ありがたい。
「ろうそくを22本」
私は年をごまかすためにチョキを2つ作って22を表した。
「御自分のですか？」
うっ（大ダメージ）年がバレたか！！私は必死に考えてある答えを出した。
「11歳の双子のです」
私はケーキなど忘れて走りながらデパートに出た。
バカだな私。
友達の誕生日だって言えばよかったんだ！！てか何だよあの店員！！普通聞くか！！そんなこと！？
そのころデパートではあの店員のところに誰か来た。

「いらっしゃいませ」
「ろうそく22本」
「御自分のですか？」
「11歳の双子の誕生日なんです」
まあいいや。ケーキなんて牛と砂糖が消えない限りあるんだから（いちごもだろ）。
ケーキと言えば不〇家。
私はいつも〇こちゃんの首をカラカラやってバカ笑いして後悔している。
自動ドアが開く。
「いらっしゃいませ」
店員が笑顔で対応している。
私の横には〇コちゃん人形。カラカラやりたいけど我慢。手が震えているけど我慢。
「すいません6号のいちごのショートケーキが欲しいのですけど」
「すいません。予約しないとお売りできないのですが」
うっ（大ダメージ）忘れてた。
「それをどうにか」
「申し訳ございません。当店は新鮮をモットーにしているので、余分に作ってないのです」
「じゃ、キャンセル待ちはいいですか」
「はい。じゃお名前と電話番号を」
はぁ。やっぱり私は運が悪いのだな。ケーキ屋の基本の予約を忘れるなんて、もういいや。魚買って帰ろう。
私はいつもの商店街の魚屋で鯖を買ってトボトボ歩いた。
そして、私が来たのは、3日前、猫に鮭を取られて、その後拾った福引き券で北海道旅行が当たった所。
あのとき、一瞬にして幸福の歯車が周り始めた感じがした。あの感じは一体何だろう？
もしかして、あの猫は特殊な猫で、私が魚をあげる度に恩返しで

なんかくれるのか。猫の恩返し。こりゃいい。
そんな事を考えている時に、鯖が入っている袋が落ちて鯖が袋から出てきてしまった。
「ああ～！！もう最悪！！何やってんだろ私」
そう言いながら拾おうとしたら、目の前になんかいる。あれは、猫か？てか猫だ！！
「にゃああん」
急に猫が走ってきた。よく見てみると、あの猫だ。
猫は勢いよく走って勢いよく鯖をくわえた。
「こら、……ま、いっか」
猫はあのときと同じように走った。
「さあ、猫ちゃん。今度は何をくれるかな？川に札束とか」
私は札束があっても絶対警察に電話しないと誓って、軽いあしどりで家に向かった。
それにしても今日は一番最悪な誕生日だったな。友達に電話するのも忘れたし。
すると、私が大好きな宇多田ヒカルの
「光」
の着メロが流れる。メールだ。相手は慎だ。
「早く帰ってこい」
そんなメールの内容だった。
私は夕飯が我慢できなかったんだなと思って、急いだあしどりで帰った。
家に着いた。
てか何もなかった。まあまた慎には正直に話そう。そう思って私はドアを開けた。
家は一人暮らしの家のように静か。何も物音がない。
「慎、帰ってきたよ」
何も返事はない。私はまだ帰ってきてないなと思って、リビングのふすまを開けた。

パァン！！多数のクラッカーの音と紙吹雪が私を襲う。
一体何があったのかとリビングを見回すと、慎と友達が２２本のろうそくがささったケーキとごちそうがたくさんあるテーブルを囲んでいた。
「ＨＡＰＰＹ　ＢＩＲＴＨＤＡＹ！！涼子！！」
そういった後、慎と友達は拍手した。私はまだ事を理解していない。
「ごめんな。びっくりさせちゃって。どうしても頑張ってるおまえを見てつい…」
「涼子、おめでとう」
「妻思いの旦那さんでよかったね！！」
「いいなー、私もあんな旦那さん欲しい！！」
すると、光の着うたが鳴った。今度は電話だ。相手は不〇家だ。
「もしもし」
「もしもし、原田様でございますか。ケーキのキャンセルがありました。ご利用ありがとうございます」
私は涙を流しながら電話口で呟いた。
「うそつき…」

第三話：バンド歴7年の専業主婦の悪あがき（前書き）

こんどからあらすじを入れる事になりました。
涼子の夫、慎がいきなりバンドを組みたいと訴えてきた。了解した涼子だが、慎の腕前は…。

第三話：バンド歴7年の専業主婦の悪あがき

「バンド組もうと思うんだ」
急に言われた慎の一言に私は正直焦った。
確かに慎はワイルドでラップもうまい。でも会社員がバンドってのはどうかと思う。
「なんで、バンドをやろうと思ったの？」
「体験していないことを是非してみたいんだ」
私は慎の目を見た。ただ一つの道を進みたいという強い目だった。
「別に慎に負担がかからなければ、私は賛成するよ」
「本当か！？」
私はうなずいた。
「涼子、ありがとう」
慎は私に抱きついた。私は顔を赤くしてしまった。
「ちょ、よしてよ」
次の日、ワイドショーでこんなことがやっていた。
「最近、会社員が仕事ついでにインディーズバンドを組む事がブレイクされています。さらに、会社員が組んでいるバンドがＣＤ会社に契約できるバンド大会にでて、ＣＤを売れば、ちょっとした小遣い稼ぎとして大会の参加者も増えています」
「そうゆうことか」
まーあ、別に慎がドラムをダカダカやっててても、かっこいいから小遣い稼ぎぐらい許しちゃう（だまれ）
「それにしても慎、どれぐらいの腕前なんだろう」
慎が組んでいるバンド（名前はアップジャンプ）が練習しているライブハウスに私は来た。
「失礼しまーす…」
私が覗くと、慎はベースをひいていた。
「じゃ、あわせるか」

ボーカルらしき人が言ったら、みんな真剣な表情になった。なんか、オーラがちがうねぇい！！
ドラムがバチでかんかんってやった後、演奏が始まった。
な、なんだこりゃ。
ギターが指使いがバラバラだし、ボーカルは音痴だし、ドラムはリズムがバラバラだし、ベースは、聞こえない。
ベースはピックがないから強く弾かなきゃならない。
でも慎は弱く弾いてる。（バンド歴7年の言葉）
「ばっちりぽくない？」
いやいやいや、全然なってません。
「まーな」
ちょいと慎さん。聞こえてないのにまーなっておい。
「明日のライブが楽しみだな」
ええ！？もうライブ！？結成何年！？てか何日！？絶対こいつら初心者だ。
「ただいまぁ。って！！のわ！！」
慎が驚くのも無理はない。
何故って？私は玄関でベースを取り出して、楽器屋でバンドスコアを買いあさって、慎の帰りを待っていた。
「な、なんだよ！？この格好！？」
「慎、私、あんたたちの練習姿見たの。あんなんダメ。私は学生時代てか父ちゃんがギターやってたから私もやっているから私、バンド歴七年なの」
「はぁ！？だから？」
「だから、明日のライブをキャンセルして明日からバンドの奴ら全員家に呼んでこい！！私がバンドの厳しさを教えてやらぁ！！」
「あの、晩ご飯は？」
「そんなのいいから特訓だ。特訓！！」
「は、はい！！」
そうして私と慎の愛（？）のバンドトレーニングを始めた。

「まず、最初はどんな歌をやるん？」
「これ」
慎はそう言いながらＭＤを出して、例の大音量コンポに入れた。
「だから修理しろよ」
「それよりバンド！！」
「ああ、自分のため人のために～♪僕はヒーロー～♪マントを羽織って飛ぼう♪」
私は聞いた直後、ギターで指使いを見せた。
「おお」
「おおじゃないわよ！！早く練習！！最小音量でね」
「……」
やはり、ベースは聞こえない。
「聞こえねぇえぇぇんだよ！！」
「最小音量だからだろ！！最小音量だからだろ！！」
「ご近所の皆様に迷惑でしょ！！」
「じゃあＭＤコンポはなんだよ！？（泣きそう）」
「それは…まぁ♪」
「うえ〝やぎゃうん！！」
翌日、案の定バンドのメンバーが来た。
「俺の妻の涼子、バンド歴７年」
「よろしく」
「よろしくお願いします！！」
なんかいい気分だ。
夢が教師だった私にとっての『よろしくお願いします』は至福のひとときの始まり。
「じゃあ、とりあえずセットを居間に運んで」
「セット？」
「おい、原田、おまえの女房、楽器をセットって言ったぞ」
「そういう奴なんだよ」
居間になんとか楽器を入れる事ができた。

てか狭いんだよ。さっさとバンドより仕事しろよこの安月給（矛盾）。
「じゃあまず腕前は変わったか見るわよ。じゃあ１２３４」
ＵＰ－ＪＵＭＰの演奏が始まった。
私はあきれた。何故なら全然変わってない。
「ストーップ！！何も変わってないじゃない！！この一日、何してきたのよ」
「あの涼子、どうあがいても一日でうまくなる事は出来ないが」
「知らないわよ！！そこらへんの雑誌の最後にあるでしょう！？すぐ覚えますとか言う暗記術が！！」
「あ、やべ弦切れた」
ついでに私もキレました。ゴールイン！！
だってこれ７年の汗と涙の結晶を！！やべで灰にしちゃったんだよあんた！！
「ふざけんにゃああ！！（はい？）」
翌日、慎に土下座してバンド講座、一日で終了させていただきたいと願った。
「すいません、慎様、私はもう限界です」
「……」
「ほら、私もはんば独学でうまくなったから慎様御一行（？）方もひたすら練習すればうまくなると思うわけで！！（サンボマスター？）」
「分かったよ。ありがとうおわびにお使い行ってやるよ」
「（なぜお使いになるんですか？）嘘！！ありがとう！！」
「とりあえず鮭でいいよな」
「（なぜあなたが決めるのですか？）」
「んじゃ行ってくる」
慎は敬礼して慎の愛車ローリングハーレー（自転車です）に跨って走っていった。
ああ、私、今思ったんだけど、解散した方がいいなと思っちゃい

ました。うん。
　すると、慎が帰ってきた（早っ！！）。しかも手ぶらです。
「鮭は？」
「いや、鮭買ってきたんだよ」
「（早っ！！）」
「そしたら俺のローリングハーレーにドラ猫が乗ってきて二つ共パクられた」
「えっ？」
　と、ゆうことは？
　ピンポーン。チャイムが鳴った。
「はい」
　私がドアを開けると、すごい人だかりが。
「すいません。レコード会社Ａなんですが。ＵＰ－ＪＵＭＰを是非私たちにおまかせを」
「どけっ！！いやＳの方がおすすめですよ！！」
「いや、Ｐですよ」
「うっしゃああ！！デビューだ！！！！！」
　結局Ｘに決めました（どこだよ！？）。

第三話：バンド歴7年の専業主婦の悪あがき（後書き）

ついにデビューが決まったＵＰ－ＪＵＭＰ。全然売れないと決めつけていた涼子にある知らせが…。お楽しみに！！

第四話：印税が無いバンドってみんなどう？（前書き）

慎のバンドがデビューしたのはいいが、印税が無いのにキレた涼子は…

第四話：印税が無いバンドってみんなどう？

慎のバンドがデビューして一週間が経った。が、一向に世に言う印税が来ない。

ＣＤ会社Ｘは語る。

印税が払える程売れてない。

当たり前だ。

なんでかと言うとそのＣＤ会社Ｘが提供している番組がエンジョイ？年金とか言う番組しか提供してないからだと私は思う。

しかもＵＰ－ＪＵＭＰのデビューシングル、『子供の未来』と『消えない命』。

老人と全然関係ない歌のタイトルだからかと思う。

はぁ、こんなのデビューしているバンドじゃないよ。印税がないなんて…。

私はいそいそと徒歩一時間のＣＤ会社Ｘへと向かった。

会社は外見からして単なるビル。

決して売れている方ではない。実はケータイも作っているのだが、使用率２％だ。

中に入ると慎のバンドＵＰ－ＪＵＭＰのＣＤの宣伝用ポスターが貼ってある。

『新星デビュー！数々のレコード会社をくぐり抜けたどり着いた宝物！』キャッチコピー長すぎです。

なぜあんな会社を慎達は選んだかって？

それはデビューが決まった夜、納得いかない私は慎と井戸端会議（？）を行った。

「なんであんな無名のレコード会社を選んだの？ａとかＰとかいるじゃないの。なんでＸを選んだの？」

私は力を振り絞ってテーブルを叩き、慎に怒鳴りながら聞いた。

「ドラム、会社の社長の息子なんだ」

私は固まってしまった。小さな声でええっとしか言えなかった。
その後、私は急ぎ足でドラムの中村君に話を聞いた。
「いやー、参ったよ。まさか親父に土下座されるとは思わなかったよ。なんかさ契約したアーティストがさどんどん解散しちゃって…頼むとか言われちゃそれに乗るしかないなってね…」
中村君が言う限りではその社長は会社の愚痴など言わず、誰にも相談しなかった。
いつも仕事だと言っていた。
そんな社長が息子に頭を下げた。それで嬉しかったらしい。
でもねー、もうちょっと提供する番組を増やさなきゃ。
私は自動ドアの前に立って、開いたと同時に入った。ＵＰ－ＪＵＭＰの歌が流れている。
私は受付嬢の前に立って三秒ぐらい経った。
「どうしましたか？」
「あのー」
「はい」
「ＵＰ－ＪＵＭＰのベースの妻なんですが、社長に会わせてください」
その後、私は社長室に連れて行かれ、社長室のソファーに座った。
「いやー、久しぶりに会いましたね。助かりますよ。おかげで売り上げも上がったし、そろそろマネージャーも付けたいと思うし…」
社長が部下から煎れてもらったお茶を私の前に置きながら言った。
「あの、印税についてなんですが…」
「ふぇ……」
「社長？」
「…売り上げ枚数分かりますか？」
「…いえ」
「教えましょう…」
私は息を飲んで社長の話を聞いた。
「２１００３０枚です」

「はぁああ！？じゃなんで印税が無いんですか！？」
「社会人だからいらないよって言われたんです。経理に」
「はぁ？！」
私は経理科に向かって走っていった。
私の目に映る経理という文字。私はそのドアをあけた。
「誰だね。お主」
急につまんないギャグ（は？）を言ってきたおっちゃんに一発蹴り入れて（犯罪っていう日本語知ってる？）経理科の中を歩く。
「責任者どこだ！！」
「社長なら社長室に…」
「ちげーよ、ばぁか！！」
「経理の中の！？」
「当たり前田のクラッカー（だまれ）」
と、愉快なショートコントを経理の社員と共にやっていたら、急に若いのか老けてるのかわからない人が現れた。
「私が責任者よ」
「ほんとかい？」
「当たり前田のクラッカー」
なんとギャグの分かる責任者なんだい（首まで埋まれ）。
そんな気持ちで私は経理課の責任者と話した。
「あなたと話があるの」
「なんですか。原田さん」
何！急展開！名乗ってないのに私の名前が何故に分かるのだ？
「それはね、極秘書類にあるの」
責任者は表紙に大きく秘密と書いてある書類をチラチラ見せる。
ああこの書類を奪って無差別に（？）コピーして東京にばらまきたい。
「なんで、なんで慎たちに印税を払わないのですか？」
私は少々キレながら言った。
「私は彼等の目を見て感づいたの。みんな、金のためにバンドをや

ってるんじゃないってね。だから印税をあげても返すと思うわよ」
私は責任者のほんとの思いを知ってちょっとひるんだ。
だけれども、私は知っている。
『印税をもらっておまえにはいい思いをして欲しい』と慎が言っていた事を。
「うそこけ！！金が欲しいくせに」
「ぬぁっ（大ダメージ）、何を言っている」
「んにゃー！！」
んにゃー？
ここにいる人間はそう思っただろう。
すると、ドラ猫が経理課のガラスの前にいてそのまま突っ込んだ。
「危ない！！」
私は叫ぶが、ドラ猫はケガ無し。
経理課のガラスはとてつもなく小さいカケラになっていた。
それにしてもどうやって猫は来たんだ？
「なんなんだよ。この猫」
経理課の社員の一人がそういった。
すると、猫は社員の机にあった魚のフライのハンバーガーの中の魚のフライを食わえるとそのままどこかへ言った。
「ああっ、俺のハンバーガーが…」
社員が落ち込んでいたらいきなり『印税、払え、印税、払え』とか言ってデモ行進が来た。
とんでもない展開に経理課の社員と私はあっけに取られていた。
「涼子！！」
デモ行進をかき分けて、慎たちＵＰ－ＪＵＭＰのメンバーが来た。
「慎！！」
私は慎の所へと行った。
「おまえ…、俺たちのためにこんなとこまで…」
「えへへ」
「ありがとう」

「どいたまぁ（超だまれ）」
そのころ、デモ行進は経理課の責任者を囲んで『税金、払え、税金、払え』と行進していた。
「ねぇ慎、どうしたの？あのデモ」
「ギターが市長の息子なんだ」
なんだかすごいぞこのバンド。ボーカルは何なんだろうなぁ（期待するな）。
「わかったわよ。払えばいいんでしょ！！」
ついに迫力で負けてしまった責任者は体勢を崩しながら言った。
「よっしゃあああああ！！」
慎たちは喜びながらはしゃいだ。
ちなみに印税は、エンジョイ！！年金の番組テーマソングの利用料と２０万枚売れたから、２００万ぐらいらしい。すごいな。

第四話：印税が無いバンドってみんなどう？（後書き）

おいおいベースもそんなに簡単じゃないぜ。と、小学生にベースを渡した慎は…（これ次回の話と関係ありません）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1550a/

お魚くわえたドラ猫

2010年10月9日13時25分発行